

1. 研究者になろうとしたきっかけ

内科医としてがん診療を志したとき大学の医局に腫瘍内科は存在しませんでした。幸い国立がんセンターのレジデントとして研修できる機会を得ました。全国から集まった同期レジデントとの研修において臨床研究の重要性を認識し研究者を志しました。

国立がんセンターのレジデント終了後は基礎研究を大学院において実施し、現在、早期臨床開発の拠点である国立がん研究センターにおいて新しい治療開発を行っています。今回の申請は社会医学研究ではありますが、診療の中でがん患者さんの悩んでいる問題点を抽出し少しでも解明したいと思い研究を行っています。

2. 助成研究の内容紹介

この研究はがんに罹患した患者さん（特に労働生産年齢の）の労働の実態をプレゼンティーズムとアブセンティーズムの点から明らかとして、がん診療・またがん患者の療養の問題点を検証することにあります。新規治療の登場により治療成績は改善しているものの実質的な労働生産性（労働パフォーマンス）の維持は容易ではないのが現状です。この研究により新たな治療開発の指標として、また国の施策としてがん患者のサポートをいかに行うか議論の客観的なデータとして用いられることを目指しています。また、この研究では情報通信技術（ICT）として携帯型端末（Apple 社の iPhone）を用いたものであり、極めて多くの患者さんに参加いただける可能性があります。

3. 2 の将来に繋がる結果予想・目標

この研究により、がん患者の労働パフォーマンスの維持が極めて困難であることが予想されます。年齢、がん種、地域、職種や治療内容などの点からその実態を明らかとすることにより、がん患者さんの社会的な問題点を解明することにより、一般国民、さらには企業に対して療養中のがん患者さんへの最良のサポートを議論するきっかけになると信じています。

#### 4. 全国の RFL 関係者に一言

日本の医療の質は高く、地域には知られざる名医・医療従事者がたくさん存在します。私も全国の RFLJ 関係者や地域の医療者と協力し、がん治療の改善とがん患者さんの QOL の向上に寄与できればと考えています。